

花の買い方、飾り方、花道の歴史まで。

# BRUTUS

2019 4/15 特別定価 680円

®

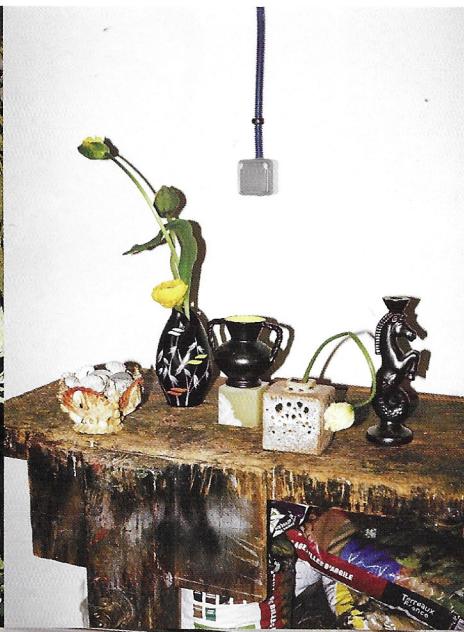
花と花束。

特別付録

FLOWER SHOP  
&  
BOUQUET  
GUIDE

花の名前を言える人はいいオトコ、いいオンナ。

## Debeaulieu



### data

カストー・フルーリスト／14 rue Debellemye, 75003 Paris ☎ (33) 1-4056-3468。10時～19時。日曜・月曜休。切り花のほか枝ものなども。ブーケをお願いする場合は電話かメールで予約が好ましい。<https://www.castor-fleuriste.com/>

### コンポジションが詩的なブーケを創る。

まるで絵画のように見える店頭に並べられた花々は、季節の花のほか、染めた花が豊富に描っているのも特徴。ウィンドウのインスタレーションも人気でこれを見に来る人も多い。ピエールのフローベースのコレクションも楽しみの一つ。

### data

ドゥボーリュウ／30 rue Henry Monnier, 75009 Paris ☎ (33) 1-4526-7868。10時～20時（金・土～20時30分、日10時30分～14時）。無休。ピエールの新作はインスタグラムで頻繁にアップされている。@debeaulieuparis

いざれ劣らぬ個性派揃い、  
パリを代表するフローリスト。

花を贈ること、買うことは、パリでは日常的なこと。パリジャンにはお気に入りのパン屋がある。自分の家用に、ディナーに呼ばれたときの贈り物として、愛する人に贈るために。用途は様々だが花を買うことは、生活に密接している行為なのだ。

最近になって、「面白い花屋がきた」とよく名前を耳にするようになったのが、北マレにある「カストー・フルーリスト」だ。人気のセレクトショップ「ザ・ブローケン・アーム」や「ルメール」など、ファッション関係の店舗デコレーションを手がけることが多いという。ショッピングアトリエは花屋のいうよりはアートギャラリー。店主のルイ・カス

源にもなっている。

でも新しいトレンドといわれており、実際に「ドゥボーリュウ」はパリの人気花屋のインスピレーション源にもなっている。



### ピエール・パンシュロウ

●フラワー・アーティスト

1979年フランス・ヴァンデ県生まれ。〈エコール・デ・フルーリスト・ドゥ・パリ〉で学び、2013年にパリのサウスピガール・エリヤの9区に〈ドゥボーリュウ〉をオープン。

1 墓地の定番、菊やカーネーションもピエールの手にかかるとまるで違う花。2 花瓶は石棺の上へ。3 朽ちたプラスチック花の上に生花を。4 苔むす墓にも花瓶から花を飾る。

まのパリを代表するフローリストといえ、〈ドゥボーリュウ〉のピエール・パンシュロウをおいてほかにいない。モードの登龍門として知られる、南仏の『イエール国際モードフェスティバル』でのインスタレーションや、パリのファッショングワールのショーエキシビションでのデコレーションなど、〈ドゥボーリュウ〉に花を頼むのはいまやスタイルの花を誌面で紹介したいと相談したところ、墓地でのインスタレーションを提案された。

「パリでは墓地は定番の散歩道。地方ではあまり墓地を散歩する習慣はないので、とてもパリ的なことかもしれませんね。静かだし、美しい墓を見るのも楽しい」。ピエールは撮影のために南仏の陶器の町ヴァロリスで作られた60年代アンティークの花瓶を持ってきた。中にはブルー・グリーンの菊の花、オレンジのアジサイ、マゼンタ・ピンクの蘭、大輪のガーベラ……、繊細なラナンキュラスは日本からの輸入花だとか。「花を供えるというより、この美しい場所に自分の花を一度置いてみたかったんです。墓地は時間の止まった静的空间なので、動的な花が映えるはず」。ピエールは定番の花を使いながらとてもモダンな雰囲気に仕上がる。完成した花瓶を石棺に置いた後、今度はその花瓶から次々と花を抜き取っては、墓地に飾りつけていく。まだ寒さの残るグレイッシュなパリの墓地がその瞬間、その一角だけがまるで異空間のように鮮やかな色彩に包まれた。